
カレーライス

イケダユウイチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カレーライス

【Nコード】

N7147K

【作者名】

イケダユウイチ

【あらすじ】

時々、カレーライスを食べたくなくなります。

僕は森の精霊に出会った。

道を歩いていて、出会った。

彼（精霊に性別があるのかなんて分らないけれど、少なくとも僕には「彼」と呼ぶことが相応しいように思える）は木の陰にこっそりと立っていた。何か大切なものを見落とさないよう一点を凝視しているようにも、ただぼんやりと地面を眺めているようにも見えた。

「やあこんにちは」

「…」声を掛けても、彼は黙ったままだった。

こちらにちらりと目をやって、それから再び地面を眺めていた。或いは何かを凝視していた。

「本当に会えるなんて思ってもみなかったよ」

もちろん彼は、何も答えなかった。彼は木の陰にじっと立っていた。太い幹から二股に分れている桜の木の隙間で、じっと立っていた。

#

僕が最初に森の精霊のことを知ったのは、5年か6年前の事だ。正確な時期と言うのはわからない。しかし、僕がいつ森の精霊を知ったかということは、大した問題ではない。

カレーライスがライスカレーになったところで、誰も気にとめない。大学生だった僕が、そろそろモラトリウムから追い出されようとしていた頃のことだ。

僕は大学構内の喫煙所のベンチに腰掛けて、ぼんやり煙草を吸っていた。そこは、ちょっとした木々に囲まれた場所だった。

【ちよつとした木々】。

紫煙の行方を追いかけるともなしに見ていると、誰かが隣に座った。フェイクファーのフードが付いたグレーのコートを着た女の子だった。僕はちらりと彼女を見た。とても綺麗な女の子だった。世の中のあらゆる「美しいもの」を集めてきて、それらを適度に選別をした後に、ほんの気持ち程度に「汚いもの」を混ぜ合わせたような美しさだった。

そして彼女は、僕の隣に座って、まっすぐに何かを見ていた。彼女の瞳は、凜として力強かった。僕は思わず目をそらした。別に目があった訳ではない。むしろ彼女は僕の方など全く気にしていない風情だった。僕の存在にすら気づいていないようだった。

僕は二本目の煙草に火をつけながら、彼女の瞳が見つめるものを追いかけた。そこには、三本の【ちよつとした木々】があった。

【ちよつとした木々】は、喫煙所という区切りを明確にするためだけに植えられた木だった。少なくとも僕にはそのように思えた。だから僕は何となくこの【ちよつとした木々】に親近感を覚え、そして見ることを躊躇った。

同じ匂いがした。僕と同じ匂いがした。

「森の精霊に会ったことはある？」

僕が木と紫煙との間くらいに視線を漂わせた頃、隣の女の子が聞いてきた。はじめのうち、僕は彼女の言葉がどこに向かっているのか気付かなかった。

「森の、精霊に会ったことは、ある？」

彼女の二度目の言葉が、僕に向かっているのだと気付いた時、次に僕は彼女の意味するところが分らなくて、困惑した。

「森の精霊？」 「そう、森の精霊」

いったい何の話をしているのだろうか。僕は彼女の顔をじっと見て意味を見つけようとした。すると彼女は、まっすぐに僕の顔を見た。たまらず視線を外した自分に、彼女の言葉の意味を知る術はないのだろうか、と思った。

「それはつまり…」

僕は地面の方を見たまま、尋ねようとした。

すると彼女はすっと近づいてきて、「何も聞くな」というポーズをした。

「森の精霊には、会ったことないのね」

僕は黙って首を振った。そうだ、会ったことはない。そもそも、森の精霊とは何なのだ。

「私も、ないの。けれども森の精霊はいるのよ。あなたや私がここに居るように、森の精霊も居るの。」

僕は頷いた。不思議と、彼女には警戒心を抱かせるような空気というものがなかった。そして説得力があった。

カラカラに乾いた喉に水が飲み込まれていくように、彼女の声はすつと僕の頭に届いた。

「森の精霊はね、こういう【ちょっとした木々】に住んでいるの。」

そしてインドカレーを作っているのよ」

そう言っただけで彼女はベンチから立ちあがった。

インドカレー？

彼女は灰皿に煙草を投げ入れて、しばらく歩いてから振り返った。
「あなたはきつと、森の精霊に出会えるわ。私にはわかるの」長い髪が、ふわりと揺れて、彼女はどこかへ消えてしまった。

#

いつもの道を歩いていった。

少しばかり雨が降っていたけれど、傘を差すほどの雨ではなかった。ふと白い服が見えた。親指ほどの大きさの小人が、立っていた。僕はその時、すっと思いつ出した。あの時隣に座った女の子の言ったことの意味が、分った気がした。

「やあ、こんにちは」「…」

僕は、確信をもって尋ねた。

「カレーの作り方を、教えて欲しいんだ。とびきり美味しいやつのは作り方をね」

彼は僕の方を見て、静かに微笑んだ。

「もちろんだよ」

そう言つて森の精霊はカレーの作り方を教えてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7147k/>

カレーライス

2010年12月10日19時22分発行